

焰の誓い -罪人の聖女- 『残火』 1.紅蓮の初陣

【極限の**快楽拷問**で服従♡】

【優しい姉たちが**生体パーツ**化♡】

【裏切り者は信徒の**肉便器**♡】

【すべてを奪われる、絶望の始まり】

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ_L



焰の誓い

-罪人の聖女- 『残火』

1.紅蓮の初陣



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系
ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ
「オルガ・コード」シリーズ

著:XYZ_L

プロローグ:雨の日のトライアングル

聖暦2018年6月。

聖堂都市セラフィア・聖女育成校の第3庭園。

灰色の雨が世界を塗り潰していた。

鮮やかな紫陽花の色さえも重苦しい湿気の中に沈んでいく。

候補生のセリナにとって、その雨は世界の終わりのように冷たかった。

「.....うう、ぐすっ.....ひっ.....」

しゃくり上げるたびに小さな肩が震える。

雨に濡れた鮮やかな桃色のボブカットが、ぺたりと青ざめた頬に張り付いていた。

その隙間から覗く瞳もまた、髪と同じ愛らしい桃色だった。

だが今その瞳は絶望の涙で潤み、灰色に濁った空を映している。

純白であるはずの候補生制服は泥と雨で無惨に汚れていた。

いや、汚れているのは泥だけではない。

股間から太腿にかけて広がる不快な生温かさ。

雨の匂いに混じって、ツンとしたアンモニア臭が鼻をつく。

少女の尊厳を奪う恥ずかしい失禁の痕跡。

それはつい先ほどの適性検査での地獄の記憶だった。

直前の光景が脳裏を焼き尽くすような鮮明さでフラッシュバックする。

◇

そこは白亜の壁に囲まれた無機質な訓練室。

中央に鎮座していたのは純白の処刑台『共感性神経接続座』だった。

『候補生セリナ、準備』

無機質なアナウンスと共に、セリナは婦人科検診台とパイロットシートを冒瀆的に融合させたようなその椅子に座らされた。

線の細い華奢な肢体が冷たいシートに埋もれる。

白い検査着の前が割られ、細い両脚が左右に開かれる。

M字開脚状態で固定された股間が無防備に晒された。

『聖体拝受、開始』

ウィーン……。

椅子の股下から細身の影がせり上がってきた。

聖体拝受プローブ。

直径1.5センチ程度。

艶やかな光沢を放つ冷たい白磁製の棒。

それは大人の兵士が使う戦闘用に比べれば針のような細さだ。

だが小柄な少女の秘裂にとっては、あまりに太く無慈悲な侵入者だった。

「ひっ……！」

プローブは機械的に一切の慈悲なく、セリナの柔らかな秘肉を割り奥へと潜り込む。

冷たい無機物が柔らかな粘膜を押し広げ、最奥の子宮口——神経の結節点にコツンと当たり固定された。

『同期』

プローブの先端からテスト用の微弱なパルスが放射される。

本来ならばそれは少しお腹が温くなる程度の退屈な信号のはずだった。

だがセリナはネオタイプだった。

彼女の神経回路はあまりにも過敏すぎたのだ。

『警告：感度倍率、計測不能！』

システムから送られた1の信号を、セリナの脊髄は100の快樂情報へと誤変換してしまう。

子宮内で瞬いた火花は、瞬く間に脳髓を焼き尽くす雷撃となった。

「あ、あゝっ、あああああっ！！？」

白目を剥き小刻みに痙攣する手足。

拘束ベルトが折れそうなほど細い手首に食い込む。

脳裏が真っ白に焼ける強制絶頂のスパークが理性を消し飛ばした。

制御不能になった筋肉が弛緩し、快感のあまり括約筋の締まりさえも吹き飛ぶ。

『強制解除！早く！』

『きゃあ、見て、あの子……漏らしてる！』

プシュウウウ……。ツ。

無情な排気音と共にロックが解除され、ぐったりとしたセリナの身体が床へ崩れ落ちる。

その股間からは愛液と尿が混ざり合った透明な液体がとめどなく溢れ出し、清潔な訓練室の床に恥辱の水溜りを作っていた。



「.....嘆かわしいこと」

雨音を切り裂く、氷のような衣擦れの音。

回想から引き戻されたセリナの前に、現実の絶望が立っていた。

白と金の法衣を纏った指導シスターたちが、無機質な瞳で見下ろしている。

「感度が高いことと、卑しいことは違いますよ、セリナ」

「精神の緩みが、下の緩みに繋がるのです。.....貴女の祈りが足りない証拠」

「清めなさい。神聖な庭園が.....臭いますよ」

周囲の候補生たちも遠巻きにクスクスと笑うだけ。

その静かな拒絶こそが、セリナの心を何よりも深く抉った。

自分はここにいてはいけない。

壊れた、淫らな穢れた存在なのだ。

セリナは紫陽花の植え込みの陰で膝を抱え、自身の呪われた身体を憎んだ。

雨水が涙と混ざり合い、頬を伝って泥水へと落ちていく。

「……セリナ？」

不意に優しい声が雨音を裂いた。

顔を上げると、そこにはセリナよりも色素の薄い、淡い桜色の髪を濡らした少女が立っていた。

姉のルナ。

セリナよりも頭一つ背が高く、あどけなさの中にもどこか頼れる姉としての落ち着きがある。

彼女は傘も差さずに駆け寄り、泥と尿にまみれたセリナを迷わず抱きしめた。

「お姉、ちゃん……わたし、また……」

「いいの。セリナは悪くない」

ルナの体温が凍えた心を溶かしていく。

その瞳はセリナと同じピンク色だが、燃えるようなセリナのそれとは違い、春の日差しのように穏やかだった。

彼女は自分の純白のハンカチを取り出し、セリナの涙と泥で汚れた顔を優しく拭いた。

「セリナは感受性が強いだけ。それは神様がくれた特別な力なのよ」

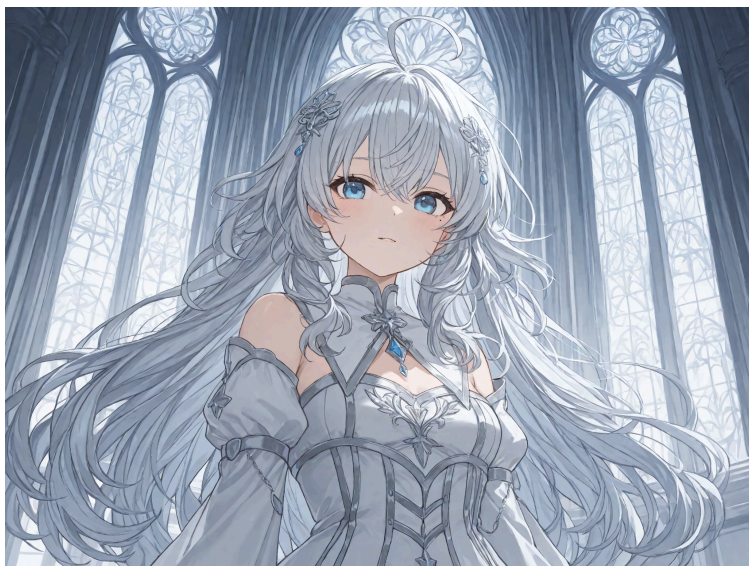
「でも、シスター様が……不潔だって……」

「私が許さない。誰が何と言おうと、お姉ちゃんがセリナを守る。
ずっと、ずっとよ」

姉の言葉は、母の腕の中のような絶対的な安心感だった。

その時だった。

雨のカーテンを切り裂くように、凜とした足音が近づいてきたのは。



「——そこで濡れているのは、誰ですか？」

二人が振り返ると、そこには月光のような白銀の長髪を持つ少女が立っていた。

イラストリアス。

既に正規パイロットとして登録されている学園の憧れの的であり、白銀の戦乙女だ。

すらりと伸びた背筋、若くして既に完成されつつある凜としたプロポーション。

彼女は静かに持っていた傘を、セリナとルナの上に差し出した。

「イ、イラストリアス様……！すみません、妹が……」

ルナが慌てて頭を下げるが、イラストリアスはそれを白手袋の手で制し、じっとセリナを見つめた。

その深く澄んだ蒼の瞳には侮蔑の色など微塵もない。

あるのは、どこか羨むような切実な光だった。

「貴女ね。今日のテストで、計器を振り切った子は」

「.....ごめんなさい、ごめんなさい.....」

セリナが震えながら謝ると、イラストリアスは優雅に泥水へ膝をつき視線を合わせた。

そして――。

「えっ.....」

彼女は純白の手袋をはめた手をためらいなく泥水の中に差し入れた。

汚れたセリナの手を取り、そっと握りしめる。

真っ白な生地が見る見るうちに茶色い泥と少女の不浄で汚れていく。

だが彼女は気にする素振りさえ見せない。

「謝る必要はありません。……羨ましいですわ。その敏感さは、貴女が誰よりも深く機械と愛し合える才能です」

彼女の声には、若さには似合わない重みと、隠された苦悩が滲んでいた。

彼女は天才ではなかった。

だからこそ血の滲むような予測演算と精神力で聖女を演じているのだ。

「誇りなさい、セリナ。そして強くなりなさい。……いつか、その翼で私の背中を守ってくださるかしら？」

それは福音だった。

欠陥品だと思っていた自分を、英雄が必要としてくれた。

桃色の瞳に希望の火が灯る。

セリナは涙を拭い大きく頷いた。

「はい……！私、強くなります。お姉ちゃんとイラストリアス様を守れるくらい、強い聖女になります！」

雨上がりの空の下、三人の少女の影が重なる。

鮮やかな桃色、淡い桜色、そして気高い白銀。

この時のセリナはまだ知らない。

この守りたいという純粋な願いこそが数年後、彼女を最も残酷な地獄へと突き落とす引き金になることを。

第1章:紅蓮の初陣

1.嘘つきと残骸

聖暦2025年5月。

北部戦線・第4防衛拠点カテドラル・ノース地下格納庫。

重苦しいパイプオルガンの音色が、冷たい地下格納庫を満たしていた。

基地全域に流れる『葬送のレクイエム』。

整備デッキの巨大モニターには、遙か後方の聖堂都市セラフィアで行われている、国葬の中継映像が映し出されている。

白菊で埋め尽くされた祭壇。

その中央に飾られた、凜々しい遺影。

「.....嘘つき」

セリナは、コンテナの影で膝を抱えていた。

ギリッと、唇から血が滲むほど強く歯を食いしばる。

7年前のあの日、雨の中で「守る」と誓った憧れの人。

誰よりも強くて、美しかった白銀の戦乙女。

だが彼女は3日前、この北部の激戦区で、敵の大部隊を道連れに散った。

「お姉ちゃんを見つけてくれるって……約束したのに……」

セリナの隣に、優しい姉の姿はない。

姉のルナが行方不明になったのは、3ヶ月前の2月。

極北海域（フローズン・シー）撤退戦でのことだった。

凍てつく吹雪の中、味方を逃がすために殿を務めた姉は、そのまま帰らなかった。

軍部は早々に搜索を打ち切ったが、イラストリアスだけは「私が必ず見つけ出す」と誓い、セリナを守りながら単独で搜索を続けてくれている。

だが、その最後の希望も唐突に断ち切られたのだ。

ズズン……。

不意に、腹の底に響くような微振動が冷たいコンクリートの床を通して伝わってきた。

格納庫の照明がチカチカと不穏に明滅する。

(……雷？それにしても変な揺れ方……)

セリナが顔を上げようとした、その時だ。

「……クソッ！聖都のバカどもが！」

怒号と共に、レンチが床に叩きつけられる音が響いた。

整備長の老技師が、真っ赤な警告色（アラート）に変わったサブモニターを睨みつけている。

「英雄の葬儀に花を添えるためだと？主力部隊をごっそり引き抜いていったツケがこれだ！」

「せ、整備長……？何が……」

「見ろ、セリナ！」

彼が指差したモニターには、基地の外郭防衛線である第3ゲート付近の映像が映し出されていた。

そこには無惨に踏み潰された旧式機、第1世代量産機『ケルビム（SO-K型）』の残骸が転がっている。

「外周区画の通信がロストしてる。奴ら、ジャミングをかけやがったな。……本部が葬式ごっこに呆けている間に、もう喉元まで食い破られてやがる！」

「そ、そんな……警報は……？」

「今から鳴るさ。手遅れになってからな！」

その言葉を裏付けるように、遅れてやってきた爆音とけたたましいサイレン音が、レクイエムをかき消した。

『——敵襲！敵襲！第3ゲート突破されました！敵影、多数！』

モニターの中で、無骨な黒鉄の群れである連合のAI量産機『ハウンド』たちが、味方の残骸を踏み越えて侵入してくる。

1世代前の主力機では、最新AIで連携する連合のハウンド部隊に追従すらできず、ただの鉄の棺桶として蹂躪されていた。

「敵の別働隊だ。主力がいない隙を突いてきやがった。……旧式のケルビムに乗った正規パイロットたちは、数分で全滅だ」

整備長は血を吐くように言い捨て、巨大な白い機体を見上げた。

SO-A01-R『セラフィム』2号機。

イラストリアスの乗機と同型であり、かつてルナが受領するはずだった主のいない玉座だ。

「こいつは今年の1月にロールアウトしたばかりだ。本当なら2月の作戦から帰還したルナが、エース昇格と共に受領するはずだった。……だが、あいつは型落ちのケルビムに乗って出ていき、帰ってこなかった」

3ヶ月間、誰も乗せずに整備され続けていた空席の機体。

「いつあいつが帰ってきてもいいように毎日整備して、弾も満タンにして待ってたんだがな。まさかこんな形で使うことになるとはな」

セリナもまた、その純白の巨体を見上げる。

そこには、姉の温もりも戦いの痕跡もない。

あるのは、残酷なまでの新品の冷たさだけだ。

そして、あの座席。

座れば無慈悲に自分の身体を貫くであろう、訓練用とは比較にならない実戦用の極太の接続プラグが、そこで自分を待っている。

そんな確かな予感が、セリナの背筋を凍らせた。

「ひっ……！」

セリナは震え上がった。

あの日の細い検査用プローブでさえ発狂しかけた自分の過敏な身体が、本物の接続に耐えられるはずがない。

怖い。

死にたくない。

でも、それ以上に脳裏をよぎったのは、冷たい海に取り残された姉の笑顔だった。

(誰も守ってくれない。……私がやるしかない)

彼女は強く拳を握り込み、自らを貫き、貪るであろう純白の巨体を真っ向から睨み据えた。

あの忌まわしい処刑台を玉座に変えるしか、未来を切り開く術はないのだ。

(私がこの機体でエースになって、軍に命令させるんだ。お姉ちゃんを探しに行けって！)

冷たい脂汗が背中を伝い、恐怖で奥歯がカチカチと情けない音を立てて鳴る。

それでも、胸の奥底で燃え上がる暗い情熱だけが、竦む足を無理やり前へと動かした。

セリナは涙を拭い、震える手で『セラフィム』のコックピットハッチに手をかける。

「乗ります……！私が、ここを守ります！」

2.冒涇の座と白銀の飛翔

プシュウウウ……。

気密ハッチが閉ざされ、完全な静寂が訪れる。

『セラフィム』のコクピットは母胎のように狭く、そして新品特有の科学薬品の匂いがした。

セリナは純白のパイロットスーツに身を包み、震える指でコンソールを操作する。

それは聖衣とも呼ばれる、教団特製の極薄バイオポリマーだ。

清廉さを象徴する白一色でありながら、華奢な少女の肢体を残酷なまでに浮き彫りにした。

目の前にあるのは、人間工学に基づいた流線型のパイロットシート。

純白のレザーとカーボン素材で構成されたその座席は、まるで神に捧げる祭壇のように無機質で、冷ややかな機能美を湛えていた。

ただひたすらに、パイロットを効率的に運用するための部品の一部としてそこに鎮座している。

『パイロット認証.....生体データ照合.....エラー』

『警告：登録IDイラストリアスと一致しません』

コンソールに赤い警告灯が灯る。

だが、セリナが座席に深く身を沈めた瞬間、システムが激しく明滅した。

『.....生体波長、ネオタイプを確認』

『——例外規定（エクセプション）：教義優先プロトコルを作動』

『ID照合を破棄。神意に基づき、当該生体を正規搭乗者（マスター）として受理します』

ウィーン……。

機能的であるはずのシート座面が、音もなく左右にスライドした。

そこに現れたのは、美しい機体にはあまりに不釣り合いな、冷徹な白磁の光沢を放つ影。

戦闘用接続プラグ（オルガ・デバイス）。

直径3センチ強。

かつて泣き叫んだ検査具と同じ白磁（セラミック）製だが、それは比較にならないほど太く、無慈悲な硬度を誇る塊だった。

聖なる座席は一転して、乙女を貫くための処刑台へと変貌する。

「……んっ、ふう……っ」

セリナは覚悟を決め、自ら腰を浮かせた。

その異物が、開発された秘所を容赦なく押し広げ、深部を突く。

ぬぷりという生々しい水音が、静寂なコクピットに響いた。

『——接続（リンク）開始』

「行きます……！お姉ちゃん、見てて！」

次の瞬間、世界が反転した。

同時に『サイコ・ミュー』が覚醒する。



「あ、ぎっ……！？ああ、あああああああーっ！！？」

視界が真っ白に染まる。

下半身から突き上げる暴力的な快樂の奔流と同時に、脳髓へ直接、膨大な戦術情報が注ぎ込まれた。

風速、重力偏差、敵影予測ライン。

人の処理能力を超えたデータの濁流が、か弱い精神を強制的に拡張し、蹂躪していく。

過負荷のサイコ・ミューが引き起こす強制的な快楽の波に、セリナの華奢な肉体が跳ねた。

極薄のスーツの下で小ぶりの双丘が激しく波打ち、硬く充血した蕾が白一色の生地を内側から痛いほどに突き上げる。

奥底までねじ込まれた極太の白磁が神経の結節点を擦り上げるたび、強引に拡張されたばかりの秘肉が熱く粟立ち、抗いようのない蜜をドクドクと溢れさせてシートを汚していく。

『システム・オールグリーン。出力、安定域を突破』

(あ、あつい……っ！おかし、くなる……こわれ、ちゃうっ……！)

頭の中を犯されるような暴力的な情報処理と、子宮を直接かき回されるような快楽の二重苦。

理性が完全に白濁して蒸発しそうになるのを、セリナは自らの唇を噛み切るほどの痛みで辛うじて押し留めた。

血の味が口の中に広がる。

彼女は震える指先で熱く火照った太腿を叩き、快感で弛緩しそうになる腕に無理やり力を込めた。

セリナは正規の出撃シーケンスを無視し、緊急展開（スクランブル）のスイッチを叩いた。

『——Emergencypurge.（緊急パージ）』

ズウウウン！！

地下格納庫が激しく振動する。

頭上、老朽化で崩れた天井の瓦礫に埋もれていた資材搬入用ハッチ。

その錆びついた爆砕ボルトが、限界を超えた信号を受けて炸裂した。

分厚い装甲板が内側からの圧力で吹き飛び、猛烈な土煙と蒸気が地上の寒空へと噴き上がる。

そこは、敵である連合のAI量産機『ハウンド』たちが制圧した広場の死角、崩れた聖堂の瓦礫の陰だった。

開かれた穴から外部データが流れ込み、システムが即座に戦況を解析する。

『敵影多数。これより、強襲へ移行します』

「いつ……けえええッ！！」

セリナがスロットルを押し込むと同時に、セラフィムの脚部と背部のスラスターが咆哮を上げた。

エレベーターなど待ってられない。

白亜の巨体は、噴き上がる白煙を纏いながら、地下から砲弾のように飛び出した。

ドオオオオオンッ！！

爆音と共に、世界が一変する。

強烈なGが全身を押し潰した直後、ふわりと重力が消えた。

瓦礫と黒煙を突き破り、セラフィムは一気に高度300メートルまで跳躍していた。

「あ……」

視界いっぱいに広がる鉛色の空。

氷点下の風がセンサーを撫でる。



地下の圧迫感から解き放たれた開放感。

空の踊り子の異名を持つこの機体は、水を得た魚のように、空中で優雅に翼を広げた。

その一瞬だけ、セリナは戦場を忘れ、空を舞う天使になったような全能感を覚えた。

だが、すぐに現実は牙を剥く。

眼下に広がるのは、鋼鉄の墓場だった。

黒く焦げ付いた広場には、無惨に破壊された味方機『ケルビム』の残骸が転がっている。

ある機体は首をもがれ、ある機体はコクピットを丁寧に踏み潰されていた。

そして、その死骸の海を埋め尽くすように、黒鉄の群れ『ハウンド』が散らばっていた。

彼らは残敵掃討の最中だった。

動かないケルビムにレーザーを撃ち込み、まだ息のある車両を踏み潰す。

人の命を数字として処理する、冷徹な作業。

「ひどい……みんな、死んじゃったの……？」

ギギッ……。

死角からの爆音と上空の異変に気づき、地上のハウンドたちが一斉にカメラアイを向けた。

無機質な殺意の視線が空中のセリナに突き刺さる。

その瞬間、無慈悲なシステム音がコクピットに響いた。

『ScanComplete.EnemyCount:22』

「20機以上……嘘でしょ……」

恐怖で思考が止まりかける。

3.紅蓮の洗礼と狂気の残骸

だが――。

セリナの脳内で時間が凍りついた。

チッ、チッ、チッ……。

世界がスローモーションになる。

舞い上がる雪の一粒一粒が見える。

ハウンドが砲塔を旋回させ、照準を合わせようとする動作が、あくびが出るほど緩慢に見える。

これが、ネオタイプの時間感覚。

膨大な情報を瞬時に処理する脳が、客観的な時間を置き去りにしているのだ。

敵がトリガーを引くまでの、わずか0.5秒。

それはセリナにとって、彼らを殺す手順を構築するには十分すぎる永遠だった。

(許さない.....)

恐怖が冷たい怒りへと変わる。

私の居場所を、お姉ちゃんとの思い出の場所を、土足で踏み荒らした鉄屑ども。

(全部、壊れて)

セリナの殺意に呼応し、システムが唸りを上げる。

視界の中で、赤いターゲットマーカーが次々と敵機に吸い付いていく。

マルチロックオン。

10、15、20。

全機捕捉。

現実時間にして、わずかコンマ2秒。

「.....落ちろおおおッ！！」

セリナの絶叫と共に、世界が再び動き出した。

シュババババババババッ！！！！

背部コンテナと脚部ポッドが一斉開放され、数十発のマイクロミサイルが解き放たれる。

それは燐光（りんこう）の尾を引く流星群のように複雑な軌道を描き、ハウンドの群れへと吸い込まれていった。

ドガァァンッ！！

残敵掃討のために足を止めていた集団を中心に、紅蓮の爆炎が次々と咲く。

回避行動すら取れなかった前衛の10機が、一瞬にして鉄屑へと変わった。

直後。

10機分の死と破壊の衝撃が数千倍の快楽信号（オーガズム）となって、セリナの子宮を直撃した。

「あ、あゝっ、あゝあああああああーっ！！??」

許容量を超えた入力。

セリナの背中が弓なりに反り、白目を剥いて痙攣する。

思考が真っ白に弾け飛び、全身の筋肉が弛緩した。

『——PilotOrgasmDetected.（パイロット絶頂、検知）』

『OutputLimiterEngaged.（出力制限、介入）』

オルガ・パラドックス。

絶頂によるパイロットの思考断絶に合わせて、機体の制御系がコンマ数秒のシャットダウンを起こす。

セラフィムの動きが、空中で完全に止まった。

戦場において致命的な、0.8秒の死の静寂。

生き残ったハウンドたちは、その隙を見逃さなかった。

一斉に、主武装である高出力レーザーキャノンの砲口が光る。

ジュッ、ジュワワワッ！！

「——っ……あ……？」

無防備なセラフィムを、無数の赤い光線が包み込む。

回避行動すら取れない機体の左肩と太腿の装甲をレーザーが直撃し、ドロドロに溶解させた。

コクピット内温度が跳ね上がり、死が目前に迫る。

だが、セリナは余韻（アフター）の中にいて、指一本動かせない。

このままでは、なぶり殺しだ。

システムは彼女に安息を許さない。

秘裂の先端である愛核（クリトリス）に穿たれた聖痕タグが作動した。

『——ShockStimulus.（電気ショック、執行）』

バチィィンッ！！！！

「ぎやあああぁっ！！??」

敏感な肉の芯から、焼き切れるような高圧電流が奔った。

快楽でトロトロになっていた神経を、暴力的な痛みが無理やり叩き起こす。

「あ、痛っ、あつい、いやあああっ！！」

涙と涎を垂れ流し、セリナは強制的に覚醒させられた。

目の前には、追撃のミサイルを構える敵の群れ。

「し、死にたくないいいいッ！」

セリナは涙目でトリガーを引き絞った。

右腕のSCS-G30"パージファイア"（ガトリング砲）が唸りを上げる。

ズバババババババババッ！！

30mmの実弾が暴風のようにばら撒かれる。

精密射撃などではない。

ただの乱射だ。

だが、サイコ・ミューが腕部の駆動系に介入し、そのデタラメな弾道を無理やり敵機へと誘導していく。

1機、また1機。

ハウンドが空中で粉碎される。

だが、敵も学習する。

AI連携による十字砲火とミサイルによる面制圧攻撃が、セリナを追い詰める。

この機体（セラフィム）には身を守るシールドがない。

敵のレーザーによってすでに装甲は限界であり、これ以上の被弾は即ち死に直結する。

「みえ……るッ！！」

脳裏に、サイコ・ミューが弾き出した唯一の生存ルート（予測ライン）が焼き付く。

だが、それはパイロットの安全を無視した、理論値だけの殺人機動だった。

考える余裕などない。

セリナは本能のままに、緊急姿勢制御スラスター（エマージェンシー・マニューバ）のレバーを叩き込んだ。

ガグォオンッ！！

「が、はっ……！！？」

内臓が潰れるような強烈なGが、セリナをシートに押し付けた。

タグの電撃の痺れとGの苦痛、そして終わらない快樂の波。

鼻と耳の奥で血管が切れる音がし、視界が灰色に染まる。

それでも機体は物理法則を無視したベクトルで跳躍し、死の光線を紙一重で回避した。

装甲は焦げ、泥にまみれ、片足を引きずりながらもセリナは引き金を引く。

だが――。

『Warning:AmmoEmpty.（警告：弾薬切れ）』

「え……っ!？」

虚しい回転音（ドライファイア）が響く。

ガトリングの弾が尽きた。

その隙を見逃さず、生き残った最後の3機が全スラスターを噴かして突っ込んでくる。

彼らもまた、万全ではなかった。

過剰な残敵掃討による実弾の浪費。

そして、セリナのミサイルを迎撃したことによるレーザー機関の強制冷却（オーバーヒート）。

AIは瞬時に計算する。

射撃ができないならば、この数トンの機体そのものを弾丸として叩きつければいい、と。

『——CollisionCourse.（衝突進路、固定）』

質量に物を言わせて突っ込んでくる黒鉄の死神たち。

鋼鉄の腕が、華奢なセラフィムの首をもごうと迫る。

逃げ場はない。

「し、死ぬ……っ」

恐怖で思考が凍りつく。

だが、脳裏に焼き付いた姉の笑顔がセリナを衝き動かした。

（お姉ちゃんを探すんだ。こんなところで死ねない）

「邪魔.....するなああッ！！」

セリナは恐怖でパニックに陥りながら、弾切れのパージファイアを投げ捨てた。

その激しい情動に呼応し、両腕から高出力プラズマブレードが勝手に展開される。

青白い雷光を纏った刃が、薄暗い吹雪を照らす。

空の踊り子の本領発揮。

セラフィムが舞うように敵の懐へと飛び込んだ。

ズバァッ！！

一閃。

先頭のハウンドが袈裟懸けに両断され、断面から溶解して爆発する。

返り血のように飛び散ったオイルが、セラフィムの白い装甲を汚す。

「あと、2機ッ！！」

残る敵が左右から同時に襲いかかってくる。

セリナはサイコ・ミューに身体を預け、操り人形のように腕を振るった。

「消えろおおーッ！！！」

ギィィンッ！！

金属とプラズマが干渉する甲高い音と共に、2機のハウンドの胴体が水平に切断された。

崩れ落ちる巨体。

爆炎と黒煙が、勝利の狼煙のように舞い上がる。

『戦闘終了。敵性反応、消失』

プラズマブレードの光が消え、陽炎だけが揺れている。

機体はボロボロだ。

装甲は溶解し、関節からはスパークが散っている。

セリナは荒い息を吐きながら、モニターに映る成果を見つめた。

黒煙を上げる鉄屑の山から、焼け焦げた黒い塊が転がり落ちた。

鼻をつくのは、生々しいタンパク質の焦げる臭い。

その傍らには、爆風で千切れ飛んだ連合歩兵（サイボーグ）の上半身も転がっている。

手にはまだ、強制ハッチ開放用の工具が握られたままだった。

彼らは掃除をしていただけではなかったのだ。

「……え？」

セリナの思考が凍りつく。

転がり落ちた部品には、見覚えのある白と金の布地、オーダーの制服の切れ端が皮膚ごとへばり付いていた。

泥と油にまみれた見習いシスターの制服。

（まさか……ここで、詰め込んだの……？）

整備工場ですらない。

この泥濘の中で消耗した電池（人）を捨て、捕まえたばかりの仲間をその場で無理やり。

現地換装（フィールド・リロード）。

連合軍のあまりに合理的で冒濫的な運用マニュアル。

『……い、た……たすけ……』

不意に、ノイズ混じりの救難信号が入った。

いや、高感度なサイコ・ミューが拾ってしまった、消え入りそうな思念の波形だった。

まだ接続が不完全だったからこそ漏れ出た生の悲鳴。

それは大好きな姉の声に聞こえた気がした。

「——ッ！！？」

喉から言葉にならない悲鳴が漏れた。

(違う。お姉ちゃんじゃない)

(私が殺したのはただの機械だ)

(中身なんていない。いるはずがない)

「いやあああああああッ！！！」

セリナは頭を抱え、コクピットの中で嘔吐した。

胃液と涙が、純白のパイロットスーツを汚していく。

『パイロット、バイタル低下。ショック状態を確認。緊急鎮静剤を投与します』

プシュッ。

首筋に冷たい針が刺さる。

強制的に意識が闇へと落とされる寸前、セリナは薄れゆく視界の中で、モニターに映る残骸に向かって手を伸ばした。

「殺して……ない……わたし……お姉ちゃんを……」

呻きは静寂の中に消えた。

密閉されたスーツの中は汗と愛液、そして失禁の熱でぐちょぐちょに濡れそぼっている。

これが彼女の初陣だった。

4.遅すぎた救済

聖暦2025年5月。

北部戦線・第4防衛拠点周辺雪原。

「こちら『グローリア』！第4拠点の応答まだありません！状況はどうなっているのですか！？」

「.....まさか陽動だったというの！？葬儀の裏をかくなんて.....！」

猛吹雪の雪原を、2機の影が疾走していた。

教団が誇る最新鋭『セラフィム・シリーズ』のカスタム機。

サフィラの駆る重装甲仕様『ガーディアン』と、ミリアの駆る指揮官用電子戦仕様（コマンダー・カスタム）『グローリア』だ。

特に『グローリア』は異質だった。

黄金の装甲に加え、頭部から背部にかけて、パイロットであるミリアの美しい金髪を模した流麗な装飾（スタビライザー）が施されている。

それは戦場における指揮官の旗印であり、同時に聖女を戦場の華として演出する教団のプロパガンダそのものだった。

彼女たちは後方で行われている国葬の間、軍上層部のメンツのためだけに敷かれた特別警戒ラインを守っていた。

だが、それは罠だった。

敵はエース部隊を基地の外へ引きつけ、その隙に手薄になった本拠地へ別動隊を送り込んだのだ。

「隊長！第3ゲートからの熱源反応、消失しました！」

「.....私が先行してシールドを展開するわ！ミリア、あなたは後方から援護を！」

サフィラが悲痛な声で叫ぶ。

彼女の『ガーディアン』は機動力では劣るが、鉄壁の防御力を誇る盾だ。

いざとなれば自分が被弾してでも妹たちを守る。それが彼女の戦い方だった。

「無茶です隊長！敵の配置も不明なのに……ッ、ですが、行くしかありませんね！」

ミリアが唇を噛み締めながら、広域データリンクシステムの出力を最大にする。

機体と同じ美しい金色の長髪を揺らし、彼女は冷静に戦況モニターを解析した。

規律を重んじる彼女にとって、このような卑劣な奇襲は最も忌み嫌うものだ。

「……急ぎましょう！整備班と候補生たちが危ない！」

サフィラは操縦桿を強く握りしめた。

（無事でいて、セリナ……！）

「視認しました……！」

吹雪の向こう、黒煙を上げる第3ゲートが見えてきた。

サフィラとミリアはスラスターを全開にして広場へと躍り出る。

「……………これは」

2人は息を呑み、絶句した。

そこは不気味なほどの静寂に包まれていた。

猛吹雪の音だけが響く中、広場を埋め尽くしていたのはスクラップと化したハウンドの残骸だった。

1機や2機ではない。

20機を超える敵の大部隊が文字通り細切れにされ、黒い油と煙を吐き出している。

そしてその死の山の頂上に、それは墓標のように膝をついていた。

純白の翼を持つ巨人『セラフィム』。

返り血のような黒いオイルで全身を汚し、装甲はボロボロに溶け落ちている。

だが、その姿は紛れもなく勝者のそれだった。

「セラフィム.....2号機？あの機体、まだ調整中の空席（blank）のはずです！」

ミリアの声には恐怖よりも、困惑と管理不行き届きに対する憤りが混じっていた。

「.....セリナね」

サフィラは直感した。

この基地で、あの機体のネオタイプ認証を突破できる人間は1人しかいない。

「セリナ！返事をして！セリナちゃん！！」

サフィラは通信を開くが、返ってくるのはホワイトノイズだけだ。

「ミリア、周囲を警戒して！私は生存確認をするわ！」

「了解！.....許せません、連合の野蛮人ども.....！」

ミリアは『グローリア』の高精度センサーを最大稼働させ、油断なく周囲を睨みつける。

その隙にサフィラは『ガーディアン』を横付けした。

勝者であるはずの白亜の巨体は、まるで力尽きたように雪原へ膝をつき、項垂れて沈黙している。

サフィラは自機の装甲を伝い、吹雪の中、セラフィムの胸部へと飛び移った。

プシュウウウ……。

強制開放コードを受理し、気密ロックが外れる。

ゆっくりと持ち上がったハッチの隙間からコックピットを覗き込んだ瞬間、サフィラの言葉は喉の奥で凍りついた。

「……………あ」

そこに拘束されていたのは、華々しい戦果を挙げた『英雄』などではなかった。

汗と涙、そして嘔吐物でぐしょぐしょになった桃色のボブカットが、白目を剥いてぐったりとしたセリナの頬にぺたりと張り付いている。

その美しい桃色の髪が、コックピット内の無機質な白磁や彼女自身を汚す汚物と残酷な対比を描いていた。

純白だったパイロットスーツは大量の分泌物で無惨に汚れきっていた。

極薄の生地越しに、サフィラの目はセリナの肉体の異様な変貌を捉える。

乙女の小さな双丘は絶頂の余韻と過負荷に未だ小刻みに震え、硬く充血した蕾が生地を内側から突き破らんばかりに尖っている。

そして下腹部。

着座と同時に自動展開するよう設計された、スーツ股間部のスリット。

その無惨に開かれた布地の隙間から、異常なほど隆起した恥丘が剥き出しになっていた。

強引にこじ開けられた秘裂へ、冷徹な白磁の極太プラグが最奥の子宮口まで容赦なく突き刺さっている。

拡張されきった肉の割れ目とプラグの隙間からは、ドロドロとした蜜と愛液、そして傷ついた粘膜から溢れた鮮血が混じり合い、とめどなく溢れ出てシート座面を赤黒く汚し続けている。

コクピットに充満する、鼻をつく科学薬品と鉄錆のような血、そしてむせ返るような排泄物の臭気。

セリナは白目を剥いたまま口元から泡混じりの涎を垂らし、四肢を痙攣させ、虚空を掴むように指をピクピクと動かしていた。

それはシステムを稼働させるための生体部品（デバイス）として、極限まで搾取され、陵辱され尽くした少女の残骸だった。

「ひ……」

サフィラは口元を押さえた。

これは戦闘ではない。

陵辱だ。

「隊長？どうしたのですか、セリナは……！」

ミリアからの通信が入る。

だが、サフィラは答えられない。

この惨状を、真面目なミリアに見せるわけにはいかない。

『——こちら作戦本部！サフィラ隊長、応答せよ！』

不意に、携帯端末から通信手の興奮した声が響いた。

ジャミングが晴れ、ようやく繋がった本部からの通信。

だが、その声色はあまりに場違いだった。

『ハウンド全滅を確認！すごいぞ、誰がやったんだ！？まるでかつてのイラストリアス様のような.....これは英雄の再来だ！国葬の日に、新たな英雄が誕生したぞ！』

「.....黙りなさい」

『え？』

「ふざけないでッ！！」

サフィラは普段の温厚な彼女からは想像もできない、悲鳴のような声で叫んだ。

「英雄？再来？ふざけないで……！ここにあるのはそんな美しいものじゃないわ！大人が……私たちが守るべき子供に押し付けた、地獄じゃない……ッ！」

叩きつけるように通信を切断すると、サフィラは力なく崩れ落ちた。

目の前の凄惨な現実へと視線を落とし、嗚咽を漏らす。

「……ごめんね。ごめんね、セリナちゃん……守ってあげられなくて……」

サフィラは涙を流しながら、震える手でセリナの拘束を解いた。

力任せに引き抜けば、神経接続の逆流（バックラッシュ）でこの子の脳が焼き切れてしまう。

システムを緊急停止させ、祈るような手つきで強制排出（ページ）のレバーを引いた。

ぬちり、と卑猥な水音を立てて。

最奥に陣取っていた極太の白磁が、震える秘肉からゆっくりと抜け落ちる。

その瞬間、セリナの身体が痙攣したように大きく跳ねた。

サフィラは豊満な胸に、汚れた妹の身体を優しく抱きしめる。

「んう、あ……あ……」

セリナが焦点の合わない目で何かを呟く。

「……おねえ、ちゃん……たす、けて……」

「……っ！」

サフィラは自らのマントを脱ぎ、汚れた妹の身体を包み込んだ。

その温もりが、せめてもの贖罪であるかのように。

吹雪は強さを増し、全てを白く覆い隠していく。

サフィラの青い髪とミリアの金の機体が、動かなくなった白い翼を守るように寄り添っていた。

だが、この日刻まれた教団の深く残酷な罪と、新たな英雄の誕生という事実は、決して消えることはなかった。

5.捕食者の笑み

聖堂都市セラフィア——大聖堂『至聖所（サンクタム）』。

外界の喧騒が遮断された静寂の執務室。

最高指導者エレノアは、虚空に浮かぶホログラムウィンドウを無表情に見つめていた。

そこに映し出されているのは、たった今、猛吹雪の北部戦線から届いた戦闘データだ。

『機体コード：SO-A01-R（予備機）』

『パイロット：候補生セリナ・ステリオン（15歳）』

『戦果：敵増援部隊（ハウンド22機）、完全殲滅』

『特記事項：ネオタイプ覚醒、および教義優先プロトコルによる強制接続』

「.....ほう」

エレノアの眉がわずかに動く。

画面の端には基地の被害状況も表示されていた。

『第4防衛拠点：損壊率40%』

『正規守備隊：全滅』

本来であれば戦線維持に関わる痛恨の損害だ。

しかしエレノアの冷徹な灰色の瞳は、その赤い数字（マイナス）など映っていないかのように、ある一点だけに注がれていた。

ルナのために用意されていた予備機。

それを訓練生上がりの少女が独断で持ち出し、単独で戦局を覆したという事実。

「面白い」

彼女の指先が、リストの中にある一つの名の上で静かに止まる。

まだあどけない、しかし悲劇的な運命を背負った桃色の髪の少女。

ネオタイプとしての素質はSランク。

そして何より、姉と師を同時に失い、心に埋められない穴を持っている。

操り人形（アイドル）としては、これ以上ない素材だ。

「拠点直せばいい。兵隊は補充すればいい。……ですが、これほどの『素材』はそうそう手に入りません」

独り言のように呟く。

ハウンド22機撃破という戦果。

そして何より、Sランク聖女の覚醒。

失った旧式機や施設の修理費を差し引いても、計算盤の上では巨額の黒字だ。

彼女にとって兵士の命も少女の涙も、すべては貸借対照表の数字でしかなかった。

本来ならば軍規違反で処罰対象だが、今の教団には新しい英雄が必要だ。

白銀の輝きを失った民衆に与える、新しい希望という名の麻薬が。



「白銀の光は消えましたが.....太陽はまた昇ります」

エレノアは薄く微笑んだ。

それは、新たな生贄を見つけた捕食者の笑みだった。

「認証局へ」

彼女は手元の端末を操作し、システム権限を行使する。

北部戦線の片隅で、今まさに姉の腕の中で震え汚れている少女の機体データに冷酷な指先でアクセスした。

「彼女を『正規聖女』へ特進させなさい。……予備機（リザーブ）の枠は不要です」

指先がキーを叩く。

ウィンドウの中で、『SO-A01-R』という文字列から末尾の『R』が削除された。

『更新完了：機体コードSO-A01』

「今日から彼女が、我々の新しい『エース』です」

彼女の決定により、セリナの機体から予備の文字が消えた。

それは同時に、少女が普通の人間に戻る道を永遠に閉ざされたことを意味していた。

ゴオオオオオオオン.....。

ゴオオオオオオオン.....。

窓の外では、まだ英雄イラストリアスを悼む国葬の鐘が鳴り響いている。

その重苦しい音色は、新たな聖女の誕生を祝う祝福のようでもあり、地獄への門出を告げる弔鐘のようでもあった。

第2章:ガラの安寧

1.飢餓と肉感

聖暦2025年10月。

北部戦線・第4防衛拠点カテドラル・ノースのカフェテリア。

錆びた換気扇がカラカラと乾いた音を立てて回っている。

薄暗いカフェテリアには、安っぽい消毒液と焦げた廃油の匂いが染み付いていた。

「.....また、指先が震えてしまいます」

「オルガの熱（ヒート）が逆流しているのですわ。.....医務室で、鎮めの処置を頂いてらっしゃい」

背後の席から押し殺したような囁き声が聞こえる。

振り返れば、セリナたちと同じ純白の軍服（オーダー制服）をまとった少女たちの集団が、食事を前に沈黙していた。

彼女たちの服装に乱れはない。

喉元までボタンをきっちりと留め、背筋を伸ばし、聖職者としての威厳を保とうとしている。

だが、極薄のパイロットスーツの上から軍服を着込んでもなお、内側から熱を帯びた肌は白磁のように青白く、スプーンを持つ手は微かに震えていた。

彼女たちもまた、この過酷な前線に放り込まれた翼持ち（セラフィム・パイロット）たちだ。

その華奢な肩には最新鋭機特有の高負荷と、終わりのない消耗戦の疲労が重くのしかかっている。

それでも食事の前には必ず聖印を切り、感謝の祈りを捧げる姿が、痛々しいほどに聖女だった。

「……また、これですか」

セリナはそれ以上彼女たちを見るのが辛いかのように視線を戻し、塗装の剥げたアルミのトレイの上にある夕食を見つめて溜息をついた。

縁の欠けた白磁のボウルに入った、湯気だけが立派な色の薄いスープ。

かつては聖なる白だったであろう、安っぽい模造品の器だ。

飲食を目的としたものではなく、タイヤのゴムのような食感がする合成プロテインバーが1本。

これが人類の守護者たる聖女への配給の全てだった。

「文句を言わないのです、セリナ」

向かいの席で華やかな金髪（ブロンド）をきっちりとポニーテールに束ねたミリアが、胸の前で素早く聖印を切った。

「糧を与え給う御使いと、白銀の導きに感謝を」

早口に、しかし流れるような動作で形式的な祈りを捧げると、彼女は嫌そうにスプーンを手を取った。

その煌びやかな髪色は彼女の搭乗機『グローリア』の黄金の装甲と同じく、煤けた戦場には残酷なほど不釣り合いだ。

「南側のルート4がハウンドに封鎖されたせいで、聖都からの定期便が2週間も遅れているんです。……この状況で、固形物が出るだけ感謝しなさい」

「分かってますけどお……。でも、整備班の人たちが噂してましたよ。北の海路もシケてて、例の積み荷が入ってこないって」

セリナが声を潜めて言ったその瞬間、ミリアの目が鋭く光った。

周囲の席に聞き耳を立てる者がいないか、瞬時に視線を走らせる。

「……セリナ」

ピシャリと、スプーンを置く音が響く。

「その話はここでは禁止です。.....あの方々との件は上層部のみが知る高度機密。私たち現場の人間が口にしていいことはありません」

彼女が眉をひそめて指しているのは、南半球を支配する工業国家ネオ・テラン同盟のことだ。

本来、清貧と信仰を旨とするオーダーにとって、実利主義の塊である彼らは相容れない異端者だ。

だが背に腹は代えられない。

この痩せ細った戦線を維持するため、上層部は教義に目をつぶり、彼らから裏ルートで工業部品や物資を買い付けている。

そんな汚れた噂がまことしやかに囁かれていた。

「だって、おかしいじゃないですか。その取引のおかげで基地の倉庫には良質な物資があるはずなのに、私たちにはこんなタイヤみたいな.....」

「セリナ！」

ミリアが強く名を呼ぶ。

その張り詰めた声音を遮るように、食堂の重い自動ハッチがプシューッと不気味な排気音を立ててスライドした。

ザッ！

周囲のテーブルにいた聖女たちが一斉に立ち上がり、直立不動の姿勢をとった。

入り口に一人の女性が現れたからだ。

「司令代行、お疲れ様です！」

「楽しんで。食事中よ、そのまま続けて」

透き通るような青い髪（アクア・ブルー）を緩く編んだ女性。

第4防衛拠点司令代行サフィラが、困ったように微笑んで手を振る。

22歳という若さで全滅した前司令官の跡を継いだ彼女には、過剰な敬礼はまだ荷が重いようだった。

聖女たちが着席するのを見届けてから、サフィラはセリナたちのテーブルへと歩み寄ってきた。

「.....ほら、セリナ。これも食べなさい」

隣に腰を下ろしたサフィラの手から、アルミトレイの上へ何かが置かれた。

銀紙に包まれた軍用レーションの固焼きパンだ。

「サフィラ姉様.....？でもこれ、姉様の分じゃ」

「私は構わないわ。オルガの影響かしらね。最近どうもホルモンバランスが乱れてお肉がつきやすくて.....。少し節制が必要だから」

それはセリナに食事を譲るための優しい嘘であり、同時に半分は本音でもあった。

サフィラが纏う純白の軍服は、彼女の豊満すぎる肢体を包むにはひどく窮屈そうだった。

歩くたびに生地が悲鳴を上げそうな豊かな胸と、安産型の柔らかい腰つき。

司令代行という激務のストレスに加え、オルガ・システムが引き起こす過剰な女性ホルモンの分泌。

その狂った副作用は、彼女の肉体をより母性的に、そして淫靡に作り変えていた。

軍服の布地越しでも生々しく主張する、魔性的なボディラインがそこにあった。

「隊長、甘やかさないでください」

ミリアが不満げに碧眼（へきがん）を細める。

「セリナもです。いつまでも子ども扱いされて……ほら」

言いながら、ミリアは自分のスープ皿からわずかに入っていた具（乾燥野菜）をすくって、乱暴にセリナの皿に移した。

「え、ミリア？」

「……勘違いしないでください。私はこの野菜の食感が嫌いなのです」

ミリアは金髪を払い、顔を背けて冷めたスープをすする。

その耳がほんのりと赤くなっている。

「残飯を出すのは教義に反しますから。貴女が処理しなさい」

「もう、素直じゃないなあ。……ありがとう、ミリア」

ぶっきらぼうな優しさ。

セリナの胸が熱いもので満たされる。

周囲では、規律正しい聖女たちが沈黙の中で食事を続けている。

外は凍てつくような寒風と、鉄の殺意が支配する地獄だ。

だが、この狭く貧しいアルミテーブルの上だけには、確かな体温があった。

（あたたかい……。ここが、今の私の居場所なんだ）

セリナはパンを齧りながら、心に刻み込んだ。

このパサパサしたパンの味を。

具のないスープの温かさを。

そして、ルナ姉様の代わりに私を守ってくれる、新しい家族の顔を。

2.埋め込まれた楔

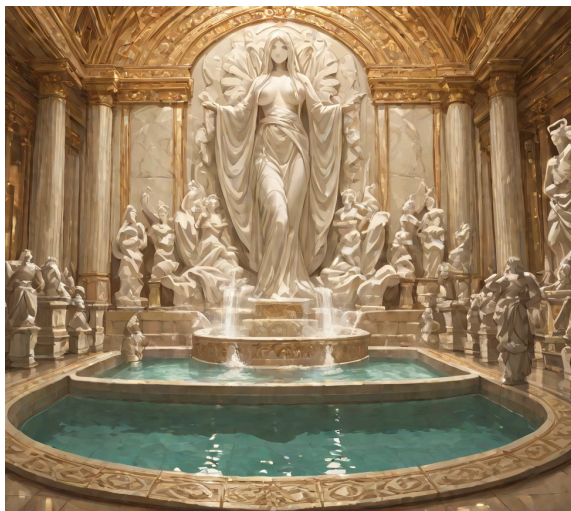
聖暦2025年10月同日22:00。

大浴場。

「ふう……」

白大理石造りの大浴場。

もうもうと立ち込める湯気の中に、甘い石鹸の香りと少女たちの安らぐ吐息が満ちていた。



ここだけは前線拠点とは思えないほど優雅な造りだ。

聖女の身体は教団の資産であり、常に清浄でなければならない。

そんな形式ばった教義に基づき、この入浴施設だけは物資不足の中でも最高級の設備が維持されているという皮肉。

それは清廉を求める信仰の顕れであると同時に、過酷な機動に晒される肉体を物質的に保全するための、冷徹な維持ドクトリンでもあった。

広い湯船には、先ほど食堂で震えていた少女たちの姿もあった。

純白の軍服を脱ぎ捨てた彼女たちの肢体は、輝くばかりに美しい。

だが、その白磁の肌には、過酷な任務の代償が刻まれていた。

「.....痛っ。シスター、そこ沁みる.....」

「申し訳ありません、聖女様。内部の腫れが酷いので、奥までお薬を塗りますね」

湯気の向こう、洗い場の一角で奇妙な光景が繰り広げられている。

全裸で椅子に座り、股を無防備に大きく開いた聖女。

その足元に、濡れて肌に張り付いた修修道服をまとったままの補給班のシスターが跪き、聖女の股間を熱心に覗き込んでいるのだ。

彼女たちの秘部は赤く腫れ上がり、痛々しく充血していた。

原因はコクピットの座席に備え付けられた接続端子『オルガ・デバイス』だ。

機体制御とエネルギー供給のため、膣深くまで挿入される円筒形のユニット。

戦闘中、数Gもの重力がかかるたび、硬質なデバイスは体内で激しく暴れ、柔らかい粘膜を容赦なく擦り上げる。

常に裂傷と炎症のリスクに晒され、赤黒く爛れている者すらいた。

それをケアするのは、飛ぶことのできないシスターたちの役目だ。

彼女たちは戦乙女の肉体を壊れてはならない精密機械として扱い、指先で丁寧に軟膏を塗り込んでいく。

一見すると背徳的な遊戯のようだが、ここでは生存のための日常的な整備の儀式だった。



「あら、セリナ。また新しいあざ？」

湯船の奥で、サフィラがセリナの肩に触れた。

濡れて肌に張り付いた青い髪が、白いうなじに色っぽく絡みつく。

お湯の中で彼女が動くと、その豊満すぎる双丘がたぷんと重たげな波紋を作って揺れた。

「.....はい。姉様が乗るはずだった機体、やっぱり凄いです。反応速度が良すぎて、私の反射神経じゃGを殺しきれなくて」

セリナはお湯につけたタオルを顔に乗せ、ほうと息を吐いた。

5ヶ月前のあの日から、彼女は正式に姉の機体を受け継いだ。

だが、エース専用チューンされた最高傑作は、まだ若い少女にはあまりに巨大すぎる翼だった。

機動のたびにシートから伸びるデバイスが身体を貫き、内臓ごと揺さぶられるような衝撃が走る。

「無理はいけないわ。.....あの子が悲しむ」

ルナの名前が出た瞬間、空気が湿っぽくなる。

セリナは視線を落とし、湯の中で自分の股間に手を伸ばした。

腫れぼったい粘膜の奥、愛核に埋め込まれた異物。

米粒ほどの極小チップだが、指先で触れると、デリケートな肉の内に硬く冷たい感触があるのが分かる。

「……んっ」

触れただけで、背筋に悪寒のような電流が走った。

他の聖女たちの聖痕タグは、単なる生体監視のためのものだ。

だが、セリナのそれは意味合いが異なっていた。

あの日の適性検査で露呈した、異常な過敏体質を無理やり戦場に繋ぎ止めるための措置。

教団が特別に設計し、愛核へと直接電流を流すようにした苛烈な戒めだった。

シスターたちにケアを頼むことすら憚られる、私だけの恥ずべき秘密。

それは屈辱的な電気の鎖。

けれど、あれがなければ私は快樂の海に溺れてハウンドの餌食になっていただろう。

あの痛みだけが私を現実に引き戻し、聖女として立たせてくれる。

「.....ねえ、サフィラ姉様」

「なあに？」

「お姉ちゃん.....本当に生きてるのかな。.....このタグ、ずっと静かなままなの」

八ヶ月もの間、何の手がかりもない。

期待しては裏切られ、セリナの心は摩耗しきっていた。

「セリナ.....」

サフィラは何も言わず、背後からセリナを優しく抱き寄せた。

むにゅっと背中に押し付けられる圧倒的な柔らかさ。

サフィラの豊かな胸と脂肪のついた腹部が、セリナの華奢な背中を包み込む。

その体温と肉感は母性そのものだった。

もし男ならこの熟れた柔らかさに溺れて理性を失うだろうと思わせるほどの、圧倒的な雌の匂いと包容力。

「信じましょう。……それに、もし何かあれば私たちの『タグ』が教えてくれるはずよ」

「……え？」

「共鳴よ。教義には書かれていないけれど……血の繋がった聖女同士のタグは、微弱な感応波を通じて響き合うことがあるって、昔整備長が言っていたわ」

「共鳴……」

セリナはタグが埋まる自身の愛核を、手のひらでギュッと押さえた。

微弱な戒めの電流が走り、ビクンと腰が震えるが、手を離すことはできなかった。

愛核の奥が熱くなるような独特の感覚。

それは科学的にはあり得ないただの迷信かもしれない。

あるいは、私の願望が見せる幻なのかもしれない。

神の奇跡。

もし本当なら。

この奥の熱さが、遠く離れたお姉ちゃんの命の灯火だとしたら。

「もう.....湿っぽい話は禁止です！根拠のないオカルトも！」

バシャーンとお湯をかけてきたのはミリアだ。

濡れた金髪をかき上げながら、彼女は全裸で仁王立ちになり、腰に手を当ててセリナを見下ろした。

その肢体はサフィラとは対照的に引き締まっている。

水滴を弾く腹筋のラインと、高い位置で張り詰めた均整の取れた乳房。

それは彼女のストイックさを体現した鋼の美しさだった。

「セリナ！明日は北棟・第3動力炉の点検当番ですよ。寝坊したら承知しませんからね！」

「わ、分かってますよう。……でもあそこの発電機、先週から異音がするって整備班がばやいてましたよ？」

「予算不足で交換パーツが届かないそうです。……まったく、ここが止まったら基地の全電源がブラックアウトするんですよ？防衛システムも、このお湯も」

ミリアは呆れたように肩をすくめ、長い脚で湯船を跨いで上がっていく。

巨大な防衛拠点でありながら、生命線をたった1つの老朽化した動力炉に依存している脆弱性。

それが今の教団の張りボテの実態だった。

「ふふっ、ミリアは厳しいわね」

「当たり前です。ここは最前線なんですから」

湯気の中で笑い合う3人。

ピンク、青、金。

色とりどりの髪と裸の肢体が重なり合う密やかな共犯関係。

周囲では他の聖女たちもシスターに身を委ね、束の間の安息を貪っている。

翼ある者と翼なき者。

その残酷な役割分担こそが、この基地を支えている現実だった。

（お姉ちゃんがいなくても、私にはこの人たちがいる。このささやかな幸せを守るためなら、私は何度でも『セラフィム』に乗って、あの戒めの電流に耐えてみせる）

——その夜、セリナは夢を見た。

姉のルナが、暗い海の底で巨大なガラス管に閉じ込められている夢を。

淡いピンク色の保存液の中で、口から泡を吹きながら何かを叫んでいる。

『——ニ……ゲ……テ……』

その夢がタグの共鳴が見せた真実だと知るのは、まだ1ヶ月も先のことだ。

3.亡霊の檻

聖暦2025年10月。

北部戦線・旧高速道路『ルート4』上空。

「各機、対空警戒を厳に。……この空域は、先週だけで第5小隊が全滅した死地です」

凍てつくような曇天の下、3機のセラフィムによる編隊が整然と低空を飛翔していた。

ミリアは操縦桿を握り締め、通信マイクへと冷徹な声を送る。

作戦目標はハウンドの群れによって封鎖された補給路（ルート4）の強行偵察および突破。

基地司令サフィラが送り出した、現在運用可能な最強の戦力だ。

先頭に行くのは、純白の翼を持つ高機動型『SO-A01セラフィム・ヴァルキリー』（セリナ機）。

防御を捨てて回避性能に特化したこの機体は、かつて白銀の戦乙女と呼ばれた英雄の愛機であり、乗り手を選ぶあばれ馬だ。

右翼には黄金の装甲を持つ指揮官機『SO-A03セラフィム・グロリア』（ミリア機）。

そして左翼には標準塗装の量産型『SO-A04セラフィム・ベル』（カレン機）が続く。

「セリナ、突出しないでください。貴女のヴァルキリーは、今のオーダーにとって唯一の希望（カード）なんです」

ミリアは自身のコックピットで、緊張に震えそうになる声を殺して告げた。

『は、はい！分かってます、ミリア隊長。……ルナお姉ちゃんの機体は、私がちゃんとコントロールしてみせますから！』

スピーカーから返ってきたのは、エースとしての重圧に耐えながらも、必死に自分を安心させようとする健気な妹分の声だった。

ミリアはその殊勝な応答に微かに目を細め、もう一つの光点へと視線を開く。

「カレンも遅れないで。セリナの死角は貴女がカバーするのです」

『了解だよ、隊長！.....臨戦態勢（スタンバイ）はバッチリ。でも不気味ですねえ。2時間前のドローン偵察では敵影ゼロでしたけど.....昨日の戦闘でセリナが暴れすぎたから、ビビって撤退したんじゃないですか？』

無線スピーカーから、カレンの緊張感に欠ける軽い声が返ってくる。

「油断しないで。センサーに映らないだけで、熱源遮断（コールドスリープ）状態で埋まっている可能性があります」

ミリアは冷静に釘を刺したが、コンソールを見つめる彼女の碧眼には、カレンと同じ疑念が浮かんでいた。

この数ヶ月、セリナの覚醒により戦況はオーダー有利に傾きつつある。

ハウンドごときでは、もはやヴァルキリーの影すら踏めない。

だからこそ、この静寂は不気味だった。

まるで力押しでは勝てない獲物を狩るために、わざと道を空けたかのように。

ザザッ……ザザザッ……！

突如、ミリアの正面にあるレーダーモニターが雪嵐のようなノイズで塗りつぶされた。

「なに……！？」

ミリアが息を呑む。

「強力なジャミング……！全周波数帯域（オール・レンジ）が潰されました。……ッ、ダメです！司令部（CP）とのリンク、ロストしました！」

警告を発するミリアの視界で、ノイズの海から一つの微弱な信号が浮かび上がった。

それはオーダー軍の救難信号（IFF）。

識別コードは『MIA（作戦行動中行方不明）』。

『……生存者？』

通信回線から、セリナの弾んだ息遣いが漏れ聞こえる。

この場所で行方不明者。

まさか。

「罨です！全機、反転！密集陣形（タイト・フォーメーション）へ移行しつつ離脱します！」

ミリアは本能的な危機感に従い、鋭く命令を下した。

軍事的なセオリー通り、異常事態においては即時離脱が鉄則だ。

だが、セリナからの明確な返答はなかった。

代わりにオープンチャネルの通信回線から聞こえてきたのは、セリナの短い悲鳴だった。

『あ、っ！？』

グローリアの戦術モニターに表示されたセリナのバイタルグラフが、突如として異常な発熱数値を叩き出していく。

『お姉.....ちゃん？』

ノイズの向こうで、セリナが夢遊病者のように呟くのが聞こえた。

「セリナ！何をしていますのです！戻りなさい！！」

『ごめんミリア！でも、そこにいるの！お姉ちゃんが！！』

「馬鹿っ！！」

ミリアの制止を振り切り、ヴァルキリーの機影がスロットルを最大まで押し込んで加速していく。

白い機体は、吸い込まれるようにジャミングの発生源へと突出していった。

「セリナ機、命令無視（ロスト）！.....くっ、このままでは狙い撃ちです！」

ミリアの絶叫をかき消すように、もう一つのスラスターの咆哮が至近で響いた。

『行かせないよ.....！セリナは、私が守るんだからッ！！』

僚機のカレンが迷うことなく機体を加速させ、セリナの後を追う。

グローリアの戦術モニターに、カレンの操るベルがヴァルキリーを庇うように滑り込む凄絶な軌道（マニューバ）が描かれた。

補充要員として配属されたばかりのカレンにとって、セリナは教団が崇める英雄などではなく、ただの守るべき年下の少女だった。

「量産機はエースの盾となれ」という非道なドクトリンに従ったわけではない。

先輩として、あの危なっかしい妹分を絶対に死なせはしないという純粋な意思。

無線越しに響く悲壮な咆哮と、一切の迷いのないその機動から、カレンの覚悟がミリアの胸へ痛いほどに突き刺さった。

だが、その健気な献身こそが、待ち伏せる敵の狙い通りだった。

ジュッッッ————！！

音よりも速く、空気が焦げる異臭と、ミリアの視界を真っ赤に灼く紅蓮の閃光が走った。

ドオオオオンッ！！

遅れて轟く爆音。

ミリアの目の前で、カレンの『ベル』の上半身が装甲ごと蒸発して消し飛んだ。

通信機から最期のノイズが鼓膜を刺す。

『……逃げ、て……セリナ……ちゃ……』

「え……？」

ミリアの思考が凍りつく。

同時に、グローリアの高精度センサーが、廃ビルの崩れた壁面から巨大な熱源を感知して警告音を鳴り響かせた。

偽装カバー（サーマル・クローク）をパージして現れたのは、ハウンドよりも二回り以上巨大な異形の重装甲機体。

連合軍重火力支援機UNI-301『ドミネーター』。

その右肩に担がれた長距離粒子キャノン（パーティクル・キャノン）の砲口が、赤熱して揺らめいている。

——完全なコールドスリープ。

敵は最初から熱源を断って潜み、護衛のベルが射線に重なった瞬間を狙い澄まして引き金を引いたのだ。

遅れてコンソールに弾き出された狙撃ログが、カレンが最初から狙い撃ちの盾にされたという残酷な事実を、ミリアに突きつけていた。

「カレン！？カレンッ！！」

ミリアの絶叫が虚しく無線を叩く。

だが、僚機のシグナルは完全にロストしていた。

『——TargetConfirm.』『
Unit03Vaporized.Unit01CaptureMode.（3号機蒸発確認。1号
機、捕獲モードへ）』

ノイズを拾った敵の冷徹な機械音声と共に、雪原のあちこちから無数のハウンドが姿を現す。

鋼鉄の巨人たちが、残されたミリアと、先行したセリナの包囲網を狭めていく。



「お姉ちゃん！どこ！？」

セリナは、背後で起きた僚機の消滅に気づくことさえできなかった。

鼓膜は遠くで起きた爆音を捉えていたはずだ。

だが、脳髄を狂わせるタグの共鳴熱と、頭の中に直接響き渡る姉の
声が、彼女の世界から現実の情報を完全に遮断していた。

『.....こっちよ.....セリナ.....』

幻聴のような愛しい声が、愛核の聖痕タグを通じて子宮の奥まで甘
く痺れさせる。

今の彼女の瞳には、雪に埋もれた廃墟にあるポッドしか映っていな
い。

「あ.....」

モニターのノイズの隙間に、懐かしい人影が見えた気がした。

あれはルナだ。

間違いない。

「お姉ちゃん！！」

セリナが機体を着地させ、必死にコクピットから手を伸ばそうとした、その時だった。

『——Sync:ForcedConnection.（強制接続）』

キィィィィンッ！！

ポッドの中の影がゆらりと動いた。

同時に、その口元のデバイスから歌のような信号波が放たれる。

それは物理的な音波ではなく、機体のOSとセリナのタグを物理的に焼き切るためのシステムダウン波だった。

「あ、があッ！？」

ブツンッ……！！

火花よりも恐ろしい破裂音がコックピットに響き、全周囲モニターが一斉に暗転した。

視界が完全な闇に塗りつぶされる。

それと同時に、最奥を貫く極太の白磁を介して、強制切断された神経接続の凄まじいバックラッシュがセリナの肉体を襲った。

行き場を失った膨大な感応波が高電圧の電流へと化し、彼女の異常に過敏な脳髄と子宮へと一気に逆流、内臓を直接殴りつけるような物理的衝撃となって炸裂したのだ。

「あ、が……あ、あ……」

セリナは悲鳴を上げる間もなく、激痛と強制的な過負荷によって白目を剥き、シートの上で無残に四肢を痙攣させた。

機体の全システムが沈黙していく。

白きヴァルキリーは糸の切れた人形のように、冷たい雪原へと力なく崩れ落ちた。

4.黄金の断罪

聖暦2025年10月同日。

北部戦線・旧高速道路『ルート4』。

「セリナッ！！」

遅れて到着したミリアの視界を埋め尽くしたのは、凄惨極まる地獄絵図だった。

右側の視界では、蒸発した僚機（カレン）の残骸が未だに赤い熱を帯びてくすぶっている。

そして正面には、糸が切れたように雪原へ崩れ落ちた純白の『SO-A01ヴァルキリー』と、そのハッチを工具でこじ開けようと群がる敵特殊部隊の姿があった。

「離れなさいッ！！」

ミリアは怒りのままに操縦桿を引き絞り、『SO-A03セラフィム・グローリア』を滑り込ませた。

黄金の装甲が曇天の下で凶々しく輝き、威嚇射撃のライフル弾が雪原のコンクリートを派手に抉る。

群がっていた歩兵たちが蜘蛛の子を散らすように退避していく。

だが次の瞬間、廃墟の陰に潜む巨大な影——『ドミネーター』のセンサーアイが、ギラリとグローリアを睨み据えた。

右肩の長距離粒子キャノンが、不気味な赤熱光を放つ。

次弾装填完了。

カレンを一撃で蒸発させた、あの死の光だ。

オープンチャンネルの通信機から、ドミネーターを駆る連合の女性士官の嘲笑がノイズ混じりに響く。

『遅いんだよ、狂信者。……雑魚どもは手を出すな！こいつは私が喰う！』

功名心に駆られたその独断命令こそが、ミリアにとっては唯一の、そして最後の勝機となった。

周囲のハウンドが、射線を開けるために一斉に動きを止める。

カッ！！

閃光が走った。

音速を超えた圧倒的な熱量が、ミリアの機体を直撃する——その刹那。

「舐めるなあああッ！！」

ミリアは押し寄せる恐怖を激しい怒りでねじ伏せ、スラスターのレバーを「逆噴射」ではなく「最大加速」へと叩き込んだ。

回避行動ではない。

鉄の殺意へと真っ向から立ち向かう、決死の突撃だ。

光の帯が左肩の装甲をかすめてあぶり、黄金のメッキがドロドロに融解して引き千切られるように剥がれ落ちる。

だが、直撃だけは紙一重でかわした。

『チッ、小賢しい！——落ちろッ！！』

敵の女性士官が焦燥の声を上げる。

ドミネーターの背部コンテナが一斉開放され、無数の近接迎撃ミサイルが吐き出された。

白煙を引いて殺到する死の群れ。

この至近距離での全弾回避は物理的に不可能。

「『グローリア』の装甲は、飾りではありませんッ！！」

ミリアは叫び、スロットルを限界まで押し込んだまま、腕部装甲を顔面に交差させて防御姿勢（シールド・フォーム）をとった。

ドガガガガッ！！

連続する至近信管の爆発。

衝撃波でコックピットが激しく揺さぶられ、脳髄が激震する。

コンソールには全損を警告する赤いアラートが狂ったように鳴り響いた。

だが、ミリアは止まらない。

黒煙と爆炎を力任せに突き破り、傷だらけになった黄金の騎士がその姿を現す。

『なっ……！？あの弾幕を抜けた……だと！？』

狼狽する女性士官の悲鳴。

長距離狙撃に特化した重装甲のドミネーターにとって、ゼロ距離の懐に入られることは、即ち絶対的な死を意味する。

「カレンの痛み……その身で償いなさいッ！」

ミリアが左腕を突き出す。

そこに装備されているのは、指揮官機のみの実装を許された対重装甲用・試作兵装。

高周波プラズマ破碎杭——『パニッシャー・パイル』。

「堕ちろ、異端（ケダモノ）ッ！！」

ズドオオオオオッ！！

ミリアの咆哮と同時に、極大の圧縮プラズマを纏った白銀の杭が音速で射出された。

ドミネーターの分厚い複合装甲を、濡れた紙のように容易く貫通していく。

物理的な破壊の衝撃波が重装甲の隙間から激しく噴き出し、鋼鉄の巨体がくの字に折れ曲がった。

杭はその最奥にあるコックピットブロックへと到達し、内部のパイロットごと、肉体への凄絶な「浄化」を深々と叩き込んだ。

『馬鹿な、たかが旧式のガラクタに……ぎ、あああああッ！？』

ドオオオオオンッ！！

短い断末魔と共に、連合の怪物が内部からのプラズマ爆発によって派手に爆散した。

黒煙と引き裂かれた鉄屑が雪原に舞い上がる。

カレンの仇は取った。最大の脅威は排除した。

これなら、セリナを回収できる——！

「セリナ、今行きます！」

ミリアがグローリアを振り返らせた、その時だった。

「……あ……」

彼女の喉が、引きつった音を立てて凍りついた。

勝利の熱が一瞬で冷め、全身の血の気が引いていく。

グローリアのメインモニターが、煙の向こうの光景を無慈悲な高倍率ズームで映し出した。

そこには、ハッチを挟み開けられ、泥まみれの雪上へ無造品に引きずり出されたセリナの姿があった。

強制接続のプラグを力任せに引き抜かれたのだろう。

無残に裂けた極薄パイロットスーツの股間からは、鮮血と共にドロリとした愛液が混ざり合って滴り、純白の雪を淫らに、そして残酷に赤黒く汚している。

ぐったりとして意識のない彼女の周囲を、ドミネーターの破壊によって制御の縛りから解かれた無数のハウンドが、統制された動きで取り囲んでいた。

そしてその全ての巨大な砲口が、ミリアではなく——地面に転がされた「生身のセリナ」へと正確に向けられていた。

『動くな』

ハウンドの外部スピーカーから、機械加工された冷徹な合成音声が響く。

『少しでも動けば、このパイロットはミンチになる』

ミリアの指が、トリガーレバーの上で激しく震えた。

ドミネーターは倒した。

目の前のハウンドなど、グローリアの火力の敵ではない。

だが、ミリアが引き金を引くコンマ数秒の間に、地表のセリナは確実に肉片へと変わる。

完全なる詰み。

『……うあ……』

通信機越しに、集音マイクが拾ったセリナのか細い喘ぎが届いた。

彼女はもう、戦術的な判断などできる状態ではなかった。

ただ薄れゆく意識の底で、本能的に悟ったのだ。

自分が足手まといになっているという現実を。

『.....ごめんなさい.....逃げて.....ミリア.....』

「ふざけないで！！」

ミリアは慟哭した。

コックピットのコンソールに拳を血が滲むほど叩きつける。

目の前の敵は全て殺せる。

けれど、殺せばセリナも死ぬ。

連れて帰るとサフィラに誓った。

守ると約束した。

カレンの命まで犠牲にして、守り抜くと決めたのに。

「.....くっ、うううッ！！」

ミリアは血の涙を流す思いで決断を絞り出した。

誰も聞いていないコックピットの中で、自分自身の心を圧殺するように絶叫する。

「.....作戦、失敗！.....これより、本空域を離脱する.....ッ！！」

シュゴオオオオオッ！！

グローリアの装甲からスモークディスチャージャーが一斉に展開された。

視界を白濁させる煙幕の中、ミリアはバーニアを全開にして空域を離脱していく。

その背後で――。

ズウン……！！

白煙の向こう、鈍い爆発光が瞬いたのを後方警戒カメラが捉えていた。

同時に、コンソールの隅で点滅していたヴァルキリーの識別信号（シグナル）が、完全に消失する。

主を奪われた白き翼は、連合の手によって物言わぬ鹵獲品の残骸へと変えられたのだ。

「いつか必ず……必ず取り戻します！だから、それまで生きて……セリナッ！！」

鉛色の空に、ミリアの誓いだけが虚しく響いた。

最強の布陣で挑んだはずの偵察任務は、僚機の戦死とエースの捕獲という、最悪の敗北に終わった。

離脱加速のGに耐えるミリアの視界で、グローリアの戦術AIが冷酷な損害評価ログを淡々とスクロールしていく。

『敵撃破：ドミネーター級1、ハウンド級4。自軍損害：SO-A04ロスト、SO-A01鹵獲』

『総合戦術判定：致命的作戦失敗（ミッション・フェイラー）』

ミリアは一矢報いたつもりだったかもしれない。

だが、「英雄の翼」の後継者——その希少な『素体（マテリアル）』を手に入れるために連合が払った代償は、彼らの計算盤の上では、決して高いものではなかった。

作品名: 焰の誓い-罪人の聖女-『残火』1.紅蓮の初陣

発行日: 2026年6月30日

発行者: XYZ_L

連絡先: <https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。
